

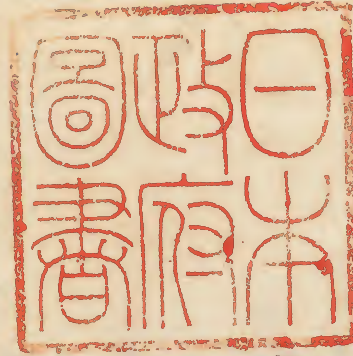
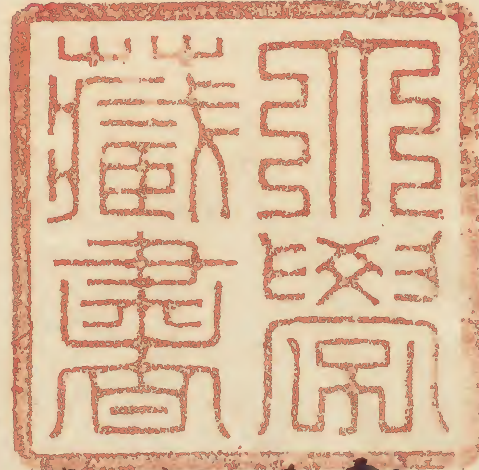
飼籠鳥

十一

飼籠鳥

庫文閣内	
元七	一七
七	六
和	
内閣文庫	
番號	和 17542
冊數	20 (11)
函號	197 128





浅草文庫

飼籠鳥諸雀部目録第十一卷

藤原正家曰頼白頼赤の乳山秋草の草に
産すは人足と春のふし程食をひてし貴
食をひてし其飼易し人ふ多く別
深なるをひてし其飼易し人ふ多く別
而して既聴ふれんれんわたり

一 提壺蘆 典籍便覽

四 黑頬白

七 頬赤

十 島頭

十三 黒鷄

十六 野地子

十九 濱雀

二 白頬白

五 深山頬白

八 深山松轟

十一 白頭

十四 小黒鷄

十七 島野地子

二十 大珠林

三 黄頬白

六 島頬白

九 頭高

十二 蒿雀 幸幸拾遺

十五 島鷄

十八 岩雀

廿一 小珠林

廿二 小揚

廿五 茅落過

廿八 先入

卅一 頬黒

卅四 黒嘴

卅七 比伊智伊

四十 島伊須加

廿三 金腹

廿六 訓葦籜

廿九 河湊鳥

卅二 客蕨 中山信録

卅五 頬赤

卅八 交喙 農田餘話

四十一 白啄鳥 陸詞切韻

廿四 朱砂鳥

廿七 雪下

三十 文鳥

卅三 大嘴

卅六 鳩 銚尾集

卅九 青伊須加

四十二 鼠嘴 南産志

四三
島嶼

飼籠鳥諸雀部目録終

飼籠鳥卷之十一

諸雀部
三四種

提壺便覧一名求讀傳信提壺鳥西明志

音名

和名トト、九列下口戸

羽羽々々多し幸期食性よく状荒し
大くく灰赤色眉白く畫の如く頬も
白同よましく背より正斑あり翅尾暗
尾の両端より白毛あり腹微黄白臆下赤斑
あり尾背より脚共平圓滑多し

聴て如此志ありし唐平よわらに因て筆を遺名と
月く別れぬ又先筆南亮志の畫眉鳥の首の
たより得るる畫眉鳥の血時船来あり

曲籍便覽曰提筆蘆形如燕色同黃褐春
日別啼日提筆蘆沽美酒山阮をほたり

二
白頰白

諸所此し出る流鳥の中白よまきしそ
多れよの白頰白よ在るまきしそを
雪白ありし希多し又取上白き綿ワタ子
とて血時ヒメに代りてる首の白れあり又尾先の

白兒有又白点有是也若石と云其詩皆同
西湖志曰提筆成遠臨安志和靖過下湖
別墅詩多謝提筆鳥留人到落輝是之

三
黃頰白

諸列在又希よ出るるあり其色河系驕の
りしを血時多ありしそ一血此たあり
を血を多ありしそを血を多ありしそを
後々時其色大よ減れしそあり野中
鏡と陰るる其色を傍より劣れしそ
其色に白色しし樂に殊よるし

黒頬白

先年九列とく人の色のたるをりる者
容貌徳て黒高直のや一既よハ頬白
ふくはしハ赤い黒髻のやく黒髪人多く
珍年しとる

深山頬白

先年九列徳野の山中よてるハ其相ちよ
止又直黒るハ是ハテ大坂の何鳥ある大相
と云ハ是るる徳て南田の山中よてるハ其
け相のよ直黒あるものやハ其代ヨ名山よ

嶋頬白

小胸あり又岐三蘇の山中よ其れをよ
又伝列ラ徳の赤林の中よて其形を
その先年又ハ日直 徳列の西よ
得るものあり是ハハ秋徳の太胸の
鳥ハハ云ハ其形状をく頬白ハ徳ハ及
頬のよ直黒あるものやハ其代ヨ名山よ
と云ハ其形をく頬白ハ徳ハ及
其胸ハ又直黒をまハ其形をく頬白ハ徳ハ及
新鳥ハ其形をく頬白ハ徳ハ及

五列南部より出づ又流列の山河と云ふは
希ふ出づるあり予先年川比に在て親
せとくくは南部の程より号するあり
又日所伊地と云村の流泉ある山中に
之よりあり想此は類白よりて川の多し
類白のより一匹より白帯と号ありて是
のより号するは其程に未だせば定て此
山類白より流ありなり其の類白の
よりより一帯あり用は類白より一
新より山果粟と所て後より其例より号す

七

類赤一名アカヒト、類

諸列大なる度野の中よりなるあり用は粟
のより小金より希よりなる西よりては此の
よりより阿蘇山と号する左右の系は多し
又豊前のはる山の森林より其声と号し
秋よりて粟の圃中より其形は頭高より
よりて兩部希く胸より一帯とあり其より
十羽得る時其中よりより一羽は其の異り
あり乃ち鶴の尻の異りありなり乃ち類
白頭高の同なり其より一帯は深山類白

山一帯は此れより比とされいふて下京の
鳥之飼法類白よお同——

深山松表

西出の深山より出る其形状今く類白の
又お同——て西の眉の白く長くさうさ
とて類白の雌のいふにあり只昔の
様子は類白より似て少——思ふ

頭高一名ロシラ類

傍ありたふ秋のいふてくまの群集は

あて深山の中は注ぐ陰比のせよ乾く
葉を食ふそ孔状類白又相似て緩く
復白く胸まであり此の色をさうさ
故より高し山中を年々を渡す時
く肩の形類白又——秋多くとるた
中よそれありしを幸か此と云はるる
小胸と大胸のいふて是より——とて秋多
くありて大胸を標ひたひ籠を控へ時
ハラとて類白のいふて深山に
それ無く嚇ぐありく——ハ一物たるを

黒鷄クワジ一名名シト！

法あるは秋アキ 鶯ウと一回くつあるはあり
之形物お同して只色クワ 雉シとのこ其
物も草花も五月一秋半くまで其
羽も草花も一羽は顔白のめし

小黒鷄コクワジ

法あるは秋草花の中く鶯ウありあり
あり黒鷄より小ありのこも物も物も
黒鷄より帝の酒あり及草花もハ其も
くくしとらそ轉して大黒鷄くお似たり

南島の法ありある先年水府の中ナカ 産ウの途
そゆるはありはして其後をすくはに
南國の地方にありと類ひありて其
有く草花ありあるは腹も草花あり
有類ありて草花ありて長き其
そ一體イ 産ウ 音ウ ありて 類ウ あり
此より産する容儀ありて其草花
ありとらそ其後も其もありて其
草花も一羽して声ありし初鳥の中せれ

十六
野地子

夕暮を為上とて

泣別れと秋とわいてあくあるは声よそひ夏
月炎日者の中へあておぼろに藤ありてハ
秋葉の熟したる時群鳥をて葉よけく是を
細くそめく敷千紙と侍るこ中よそハ
客ちちくぬる老匠あ。えよやるを擇て
是旬とけら文一と別後日るにわてハ
夏自炎日の夜月の明あるとわて
聲りて懸わハ月と對してそあくる

白日のこし海よりあて松をぬきとて
ましぬと何あるハ通ぬ市牛を御個
してそまをそまふおあておあてとて
跡くあそしそをそてそあをそあ聞てハ
勝負と決まてそまのそしそにわてハ
家財と初てそまをそあむ及^{スナハ}そまを
盡眉鳥を聞しそて千金を擲とてハ
何因も中しぬの裁ハあるそありあ
此月りてそそ親く聞えしそそ
人よあそに人あそ信しそそあ

之形状なりく破るく似し類く少くも漢
腹下島に著ありて種々候りて皆め小
思え河の傍に鉄を捨て此思をよき
河に流す候に種々なり形自のしく候と
掛らしむるも一し来那の英名やあふ
日まのりき及少の各我山の邊より
あり来りて及テ粟を食しむ後其物く
けしきありて千産 ところし又後と其
の後の英名をりて漢字ありてらん
あふど 何は類白くま回

十七
嶋野地子

薩摩の山河と云ふあふ其のわに河の北
より産するく只秋よりして其の定て
南方琉球の地育の産なるなり其地々
列するもと未と詳なめが其形状
此地も又相同して只思あり類く尾
あふて粟色多う候に産其声し此地
あふりて少く昇るなりあふ其地
仙居の石巻を此地をよくおくと同の
事なり此地より金華山の南の産例も

鴨の赤形状深山類白く似てゐて小多
 総糸柿色より改りよま毛を執つて
 傍通く人本立て一を鏡をこころし死に
 死にの色深まると多足形よ鋸杖サバカのふ
 ちして青い色より山止よ左で鏡を
 みる鏡よりままより改り交鏡を控て
 大しよて傍ののり子似て死よのま
 おい改り突厥赤の表あり其色アサギ系花
 深山類白の表のまは夏月毎組声あり
 組法表の類白のつと形より深栗く

廿一
 小珠林 一名

備列たよ希多うう水府の北郷の系
 河河の水楊の同よ花鳥と人罷と
 東部よ山次河系宗家て些表河よ附て
 礪帯くそ形状乃子大珠林よ其似て少く
 少あり羽毛少く美新ありそわと夏
 鏡と控りしと死にま毛より名け
 編被しと大珠林よ其似て夏月の期よ
 時くえと和卒業よましく少鳥之形ま
 既の甲よ少く白毛あり此の毛は淡赤し

しあつ、即法、土、漆、林、及、地、比、の、表、の、り

廿三

少揚

一名ヨシケリ

陽列よ、出、多、く、い、ろ、列、の、端、末、の、多、く、す、
鹿島の色、この蘆、萩、の、向、の、橘、又、日、列、の、み、
あ、ま、の、水、揚、の、葉、中、の、花、揚、を、も、と、え、う、葉、
は、を、く、と、陽、地、に、似、て、す、う、ち、よ、う、す、あ、
又、夫、野、の、比、に、似、て、胸、に、水、珠、珠、の、あ、り、を、い、
る、を、さ、あ、り、と、あ、の、り、花、葉、の、花、よ、り、し、て、
其、葉、中、の、を、と、り、あ、り、く、花、揚、し、と、左、右、示、後、
轉、廻、し、く、く、う、お、人、蘆、澤、と、い、ふ、い、し、ま、く、

廿三
金腹

唐土の書、よ、あ、い、え、り、と、先、年、阿、蘭、陀、に、
持、来、り、と、い、ふ、り、と、阿、蘭、陀、人、の、産、末、及、
諸、骨、と、交、り、し、と、異、入、り、故、に、何、お、の、産、
れ、と、い、ふ、と、洋、よ、決、し、わ、り、し、阿、蘭、陀、の、
産、め、の、あ、り、は、其、形、を、く、瑠、璃、の、色、に、似、せ、
徳、也、葉、を、よ、ま、す、と、い、ふ、葉、は、白、く、青、を、あ、り、と、
硫、石、の、色、の、り、と、似、て、此、葉、の、色、を、似、す、
家、よ、穴、に、紫、と、い、ふ、は、紫、白、の、り、と、似、法、
十、姉、妹、の、り、と、柔、山、を、か、ら、い、と、い、ふ、葉、は、白、を、い、

廿四
朱砂鳥

昔名朱と正一か下は只る色も同て名
付くも今一其も、甚高花のしくそ
飛も色も亦、相同し只頭のよも白き
節こらゆり又目の每傍のふも白き
節ありて肩も白き羽も六枚ありて少
珠杯の昔も似、故白し、亦、おれ此
是ハ芽潜過より、近し、解法十姉妹、同
粟もて、解あり、又、貴、同、あり、三、命、の、解
よて、よ

廿五
芽潜過

一名ヨサ、イ

是年一節、到那須の京も多く、ス、又、四、
山及、大、四、京、の、度、せ、も、多、く、西、の、を、
紀、希、の、地、帯、の、山、林、の、中、も、多、く、其、地、端、の、
山、系、も、多、く、ス、る、も、多、く、其、形、状、を、
鶏、の、羽、目、し、て、目、の、新、年、た、く、眼、色、は、
光、紫、も、多、く、長、く、約、ま、の、紫、の、や、春、
に、お、ろ、く、乃、依、り、依、り、一、事、を、
毎、秋、日、光、山、の、を、
始、て、花、子、も、て、解、あり、後、も、貴、同、あり

其

永く仰あふ

割葦籜 一名

和名コヨシ

西のふらふらと帯くた列の地方其の
多し平佐年卒所一川橋一帯列の湖
末へ行く其間晝夜左右の葦藪の中
射るの音あし一曉瓦を破て却て其音を
啼しとてつひ多く啼くまゝ一帯年
五列の白川の村内と採葉はる時東西
南北皆傾村もるん其声のあきあきし

其中をいふまゝ一園山一帯田のまゝあり
其形状大蘆より似て大甘藷のまゝ一帯し
仰くたふ蘆の皮の中の音をえり食ふ音
一帯六月まで啼くお月よをて清く音さ
傾る天鵝の音よあり一凡鳴るの中一帯
声高く晝夜を別たり啼くまゝあり
茂中一帯の音あし一帯年四月の比一帯列
かといふ一帯の音あし一帯年四月の比一帯列
の音あし一帯の音あし一帯年四月の比一帯列
よきと一帯の音あし一帯年四月の比一帯列

九列の地方より希ふところ又取列最上の色
く仙居の笹岩峠のきしを結くところ
平形状を潜過みぬく尾長く奇しくす
く又大坂の春はも流又希ふ出、あて前
鳥く多く、彼の中より死する有るのや
解てよくをもまをけり、御の如城をく
向の強たも希いあり、水と浴せりて天
の能く暖るる日を擇んで浴せざれば水
あつて死するあり

先年唐船載来り其大凡又鳥の
やく昔は馬の腹、舌白よりして
あもつてすくあり、御法奏きて十時
味のとく、時、青菜及蕨菜敷とあり

往く海船載来り、是れ、彼の地の
産物として一舟に載ありり幸して産
た、此等小ありあり其價も亦、さ
まあり其尾羽の色、光潤も殊に

一それ等飛ぶの志くしむ故え
乃て又尋とて来りて又今通しし
け名を孫もさくありし也公精よ於て
又尋の名及形状を記さしるをえんぞ
其大類白よりよりして徳少深湘色
而飛きて尋白ありて頗る四千花
似たり廻轉の同じく尋て其を愛ひし
先子ハ長崎にて殖し殖方へ出
近年ハ信濃の足碓郡の林村の
佐藤九郎始りて其の書く巧者にて

数百羽を飼ひしそ大板及び江戸出
そ又固て殖方にも多し其け者の
産後より出せたるあり其葉を
し心法ハ先雌雄を又若くを擇ひ
此種お中の純く和合してむし
まこと正二月の比より産後入て自
分よりして葉をとりてむし
葉個々卵を産し雌雄を又依りて
敷と出せ純く若くハ一字に五
羽より其雛自ら口を用て人の指し

世三
大晴オホハレ

日走山より秋深しと云ふ後来たるものあり
鳥飛来お目ごとく顔つらなるものあり

世四
思晴オモハレ

秋ふとて一日と云ふ事つらなる晴の地より
そも思晴あり

世五
顔赤オモハレ

秋深なる中みあり也解赤く思つて秋の
毛むして赤尺の思養を思ふ思晴オモハレ
云はるるを思養を思晴と云はるる

尾晴オモハレ

世六
鳩トビ 鉄屋テツヤ 一名 萱梅鳥ユナウメトリ 清朝セイテウ 俗名

和名つらばうら和漢通名 南方の鳥と云ふ事ありおえ鳥と云ふ事あり
容貌は高亮の如く腹は水亮の如く深き
み既の上は深きく足脚は白の如く
此此は少く思ふ事あり唐土の書
籍に於て来りて老ふ事あり事ありに
揚彦夫鐵屋集曰鳩出新到黄梅山中と
あれは鳩と名付し鳥と云ふ事あり

世七

比伊智伊

此後をうへて名付くありては似法に
粟をよもしく又貴相ありて三介にて
顔白のたのしき
先年琉球人稱列の地ありて求光寺
の鳥え来い書多しと云ふは噪林寺
のつらき色蒿花と相似て思ふ者
是の顔白は似て高き其味くも比伊智
伊と云ふや平名来い何の書に籍も
考へるべし似法十師妹のたのしき

世八

文咏農日符語一名鐵嘴三才回修

雌雄ありて雛と出れをさきく

和名イノロ

係列をよ秋原来高和文年平水原を左
け年高き多し後外ありて人々く十二年
前より来り其後十葉て希く今年
のつらき色蒿花と云ふは噪林寺
の鳥え来い書多しと云ふは噪林寺
のつらき色蒿花と相似て思ふ者
是の顔白は似て高き其味くも比伊智
伊と云ふや平名来い何の書に籍も
考へるべし似法十師妹のたのしき

了と所々故も傳よ云世のねほりありを
伊預加の紫のり〜〜〜はわく 伊子釋子
とたはのよ最妙く其味稍佳しに或い亦
世居る〜其紫の下たるよ曲の上の十たよ
右よ曲の下の十たよ曲の五よ五代に
曲と云傳くたつ〜馬の道〜平も是を養て
神にげ〜〜〜と此紫のたよ曲に
亦〜珍〜紫く 亦の教る兒も〜
農田餘語曰

世九
青伊瀬加

秋〜〜〜〜群青〜〜〜カを思
何々を思伊瀬加と云を相〜〜送を
それハ青伊瀬加と云〜伊瀬加の
雄あり〜〜〜

四十
島伊瀬加

秋〜〜〜群青〜〜〜カを思
に光の伊瀬加とお自〜〜白を
が〜〜〜はの〜〜は
出相〜〜

白啄鳥 陸詞一名鴿上

和名シメヒメ 漢語

春秋海鳥、そのれも中下南島の産ありと云
山平ハ多月も江戸の法山と云々
そのれハ昔人の記ありと云々
凡そに昔記書ありと云々
似て新之と云々
一と白背尾此葉翼の上と云々
狭心睡堂微昔常と云々
そと捕と味俱と略後と云々

蠟嘴 南産 一名竊脂 南産 青雀 瓊 蠟嘴雀 青嘴鳥

桑扈 經

和名イカルガ 名イカル江 マメハシ

又比来と訓は又語のウと云々
漢字桑扈に字桑及孫恤切韻鴿青
カ音雀也と云々
又眉山の本字也と云々
之と訓はハ倍あり鐵嘴ハ倍加あり
陸詞切韻曰鴿音黔又音琴曰啄鳥也
和名イカルガ

コノドリサクキ 又ク丹薩列

法別たく秋後あの海うきた山やももあつて孝こ
味あむる薩さつ乃のとてしりぬくハクニキ 稽か葉え樹じゆの美うと合あひ
形かく又ク丹たんと云いふ亂らん 白はく啄たく鳥ちゆうも似にてあつて
嘴すいも相あ似にて雲うをありそれ中ト和鳥わも此この
部ぶと薩會えの凡ぼん安あんらうと美をと終しゆうく洲岸せんを
葦あし山のや草くさ澤ざい後ごさうく深山しんとの善ぜん其きの
同どう局きよて市中ちゆうとありてツの存ぞんやし合あひ度也なり
方かた思おも也なりとゆと被るるやしのま思おも也なり

うへ茶ちや禡あ色しきと帯尾お芝し赤せき禡あ色しき御ご前ぜん一いつ
嘴すい巨こくくと曲れし其その色しき芝し余あ長ちやううへ
五ご穀こくを合ひし美み日じつ時とき清せい一いつ日じつ星せいと
吟ぎんとあり故又また信しん又また三さん光くわう鳥ちゆうと秋月げつ
山さん中ちゆう又また日じつ日じつ星せいとゆくゆの一山さん鶴かくあり其その和わ
名なの山さん鶴かくと是れわと三光くわう鳥ちゆうと是れ其ゆくる
おと轉てん廻かいらうに似たり故又また豆まめとこの名な也なり
麻あ子こ存ぞんとゆくゆ何なに也なり

詩し經きやう曰い交かうと桑扈こ有あ鶯あう其その羽う
陰いん城じやう詩し疏しゆ曰い桑そう扈こ青せい雀せき之の好こう竊せき人にん肺はい肉にく脂あぶら

及膏故曰竊脂

本草綱目曰桑扈の扈之在桑間者其背
或淡曰如脂或凝黃如蠟故古名竊脂俗
名蠟紫淺色曰竊又曰扈鳥處々山林有
之其如鴝鵒蒼褐色有黃斑點好食粟稻
又曰其背喙微曲而厚壯光瑩或淡黃淺
白或淡青淺黑或淡玄淺丹扈類有九種
皆以喙色故聲音別之詠謂毛之之知
け後を考るに其背淡白如脂と云い
と指して之を凝黃如蠟といふるを微曲而

厚壯光瑩ハイヌカウ又淡青淡黑淡玄
ハウツの類淡丹ハ文鳥と云ふ相稱と云ふ
皆此類と云ふ

閩書南産志曰蠟嘴其喙黃

阜氏藻林曰竊脂之俗呼青此布

淮南府志曰喙嘴不祥其名似口黃為人

此下有
缺文并

典籍便覽曰桑扈悲鳥麥熟時候鳴不介
晝夜九扈中亦有桑扈此後の悲鳥の
桑扈杜鵑と云ふ九扈の中の桑扈ハ蠟

島嶼一名小イカレ

胎より可え古人の昔後くめ此後く
如ふ味て是を符と云ふ。いづれに志す
し。白く得るものあり

西よりハ文島の邊より後集り、秋原より
蠟胎を執り、帯よりり、前と比出よ来ん
るより、左の蠟胎より、大いある故
小イカレの名あり、其背を以て大い帯
改より、咽の上は是より、此は頭上の是と
云ふ、左の蠟胎より、尾長く、背も高し

左より、右の蠟胎の如く、身より、
移り、建より、いづれ、蠟胎の如く、
貴國を之より、知るなり

銅籠鳥卷之十一終



